転換の魔剣と抑止の聖剣

狛井菜緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転換の魔剣と抑止の聖剣

【Ｎコード】

Ｎ９０９９Ｙ

【作者名】

狛井菜緒

【あらすじ】

父親の借金を、冒険者となって各地で働き、その金で借金を返済しきった没落貴族の娘ユーリット・ファベルは、久しぶりに家族から大至急帰って来いと呼び戻されて、家に帰る。しかし、彼女を待ち受けていたのは辛い現実だった。何故か嫁ぎ先は隣国で…相手は天敵だった。只でさえ苦労している女の子がさらに頑張る話です。

序幕（前書き）

誤字脱字があったら教えてください

・世界観・

神々の祝福が根強く残る世界で、危険な魔物などが普通にいるため常に戦力が必要とされてます。

先祖代々受け継がれてきた血筋にまで神々の祝福が宿っており、祝福を持たないと言う人間はいません。

いるとしたら異世界人です

序幕

ママレカ公国の南西の港町・エレナダの冒険者ギルド《海の秘宝》には、今日もたくさんの屈強な冒険者達が出入りするなか、掲示物の前に一際異彩を放つ少女が立っていた。

年の頃は１６か１７ぐらだろうか。白い髪を藍色の紐リボンで結い上げ、華奢で小さな身体を騎士の洋装と星銀製の甲冑で包んみ、腰には容姿とは真逆の黒い剣を帯びている。

清んだ菫色の瞳と雪のように白い髪と肌が一際美しく魅せており、さながら貴族の美少年に見える。が、身体の凹凸でかろうじて少女だとわかるぐらい、色気は乏しい。

その気品からして貴族の息女である事は間違いなく、なぜこんな荒くればかりいるギルドにいるのか疑問に持つ者も多いだろう。彼女の名前はユーリット・ファベル。

ここ《海の秘宝》屈指の高位の冒険者で、現在受けていた依頼を終え、次の依頼を受けるため掲示板に貼られた掲示物を見上げていたが、一枚の依頼書の内容を読んでユーリットは眉間に皺を寄せた。

《魔法騎士ユーリット・ファベル殿。大至急、家に帰還されたし。

ロベルト・ファベル》

「…兄上…。」

いつも父が再三に渡り帰還の依頼書を、ウザイほどギルドに送っていたのだが、今回は一番上の兄の依頼にユーリットは首を傾げた。

あの穏健な兄が何故ギルドに帰還の依頼書を出したのか…ますます気になる。

もしや病弱な母に何かあったのだろうか…。ユーリットは五年前の出来事を思い出し、胸に苦い気持ちが広がった。

5年前、ママレカ公国のファベル伯爵家は借金で首が回らない状態に追い込まれていた。

ユーリットの父、ユリアス・ファベルは事業に失敗し、家財の殆どを失った。

使用人も雇えず、領地は稀にみる不作で八方塞がり…このままでは終わりだと言うときに、心労が溜まったユーリットの母は倒れてしまったのだ。

医者にみせる金もなく、途方に暮れていたユリアスと兄二人を見ていたユーリットは、このままでは駄目だと、一大決心をして家を飛び出し冒険者ギルドの冒険者になった。

幸い、ユーリットは祖父から剣をみっちり教えられていていたので、ギルド内でも等角を早くに現し、１５歳で家の借金まで返してしまった。

また、冒険者の仲間達からも色々な技術を教えられたせいか、野外戦闘や魔法まで習得し、今では《黒剣のユーリット》と恐れられるほどの実力者として成長している。

『しばらく、家に帰ってねーんだから、そろそろ帰ってもいいんじゃね？』

「……。」

腰に帯びた相棒の言葉にユーリットは、憮然としたまま、依頼書を掲示版から剥ぎ取ると、カウンターへと向かう。

「あら、ようやく帰る気になったの？」

「…はい。母の容体が気になりますし」

「依頼は確かに受諾したわ。無期限の依頼だから、しばらくノンビリしてきなさいな。あんた最近働き詰めだから良い機会よ。」

「はい…」

ギルドマスターのエナに、複雑な表情を浮かべたまま一礼すると、ユーリットは外へと出る。

なんだかとてつもなく嫌な予感がしたが、母が心配なので渋々なが

ら家へと向う準備をするため、宿へと向かった。

ユーリットの出ていく背中を見送ると、エナは依頼書を屑籠に丸めて放りこみ、苦い表情でユーリットが出ていった扉をみやる。

「はぁ…ごめんね。ユーリット」

エナはカウンターに肘をのせ、溜め息をこぼし、ぽつりと誰にも聞こえないように呟く。

ユーリットはエナに取っては可愛いい妹分だった。

控え目で真面目な性格だったが、どんな小さな仕事も嫌な顔をせずに受けて、必死に働き、魔法騎士にまで登りつめた彼女を、ギルドのメンバー達は皆大切にしてきたが、今回ばかりは守りようがなかった。

エナは、冒険者の登記書類の棚からユーリットの登録書を取り出すと、思いっきり縦に裂いて、先程の依頼書と同様に屑籠へとそれを入れた。

序幕（後書き）

《騎士の家門》

戦闘能力の血の祝福では最高と言われています。

この血の祝福を持つ人間は戦闘能力に特化しており、通常の人間の5倍の身体能力をもつ。（女子は訓練しないと発揮できません）

そのため軍人では将校に多い。

《術士の系譜》

魔力を強く宿した人間が持つ祝福。母から子に遺伝しやすいので血の祝福と同類扱いになっている。

《王権の王冠》

王家がもつ特殊な祝福。覇気や統率力をＵＰする。嘘が見抜け、状況判断や行動力などカリスマ性を持つ…ｅｔｃ

などなど

一幕（前書き）

ユーリット・ファベル（１７）

・身長１５７ｃｍ
・体重４６（鎧抜きで）

・容姿

白髪に紫色の瞳で、少し猫っぽい

・血の祝福

《術士の系譜》と《騎士の家門》

・師の相伝

いろいろ

・資格称号

魔法騎士

・二つ名

《黒剣のユーリット》

備考

小さな頃から祖父に鍛え上げられたせいか超人離れした体力と身体能力を持つ。
素直で真面目な性格なので、ギルドのメンツから色々な技能を教えて貰い微最強。

物静かで争い事を嫌うが、容赦はしない。

一幕

ユーリットは魔法騎士と呼ばれる称号資格がある。

魔法騎士とはそのまんま魔法が使える騎士のことで、攻撃にも防御にも特化した称号資格であるが、なりたいと思ってなれるものではない。

魔法騎士になるためには二つの血の祝福が必要になる。血の祝福とは、神々から祝福された人間の家系で、産まれた時から資格を持つことを血の祝福と言う。

ユーリットの母のエリーゼは魔術師だったので《術士の系譜》と言う血の祝福がある。つまり、魔術師の血筋なため、ユーリットも魔術が使える。ユーリットの父、ユリアスも《騎士の家門》という武術が特化した祝福を持つ。

つまり両親の祝福を両方受け継いだので、ユーリットは魔法と剣術を得意とする騎士の称号を得ることが出来たのだ。

血の祝福はこの世界の人間が誰でも持つが、《騎士の家門》や《王権の王冠》などの祝福は数はあまり多くはない。

血の祝福とは逆に、師から弟子への技術の継承をすることで、資格を得られる事ができる。これを師の相伝と言い、こちらは血の祝福とは違って数多く存在する。

ファベル家は代々《騎士の家門》の血統で、歴戦の勇士が多くユーリットの祖父エドワードは将軍職についた程の傑物だった。
父は軍職にあるものの完全な裏方で、軍部の補給物質の運搬を指揮している。
兄達もみな騎士団に就職したが、まだまだ新人なので下っぱ騎士といったところだ。
多分、純粋な武術の腕ならユーリットの方がはるかに強いのだが、五年間家に帰っていないユーリットはそれを知らない。

ママレカ公国の南西の港町エレナダを出発して三日後、ユーリットは故郷のバーデンファベルに到着した。
屋敷はバーデンファベルの街の北側にあるため、街の外壁の南門から入らなければならない。

ユーリットは南門を通過すると、フードで目立つ頭部を隠し、慣れ親しんだ中央通りを馬の手綱を引きながら、ゆっくりと歩く。
五年も経つと街の様子もだいぶかわり、以前より賑やかな活気を取り戻したバーデンファベルの街を見ながら、ユーリットは微かに口元を緩めた。

『ユーリット、ここがお前の故郷か？』

「…うん。ヴァルは初めてだっけ」

『お前と出会った魔謀の森は反対方向だかんな。お前の仕事は殆ど

南と西側が多かったし…こっちはあんま来てねぇな』

黒剣の相棒に「そう」と返すと、ユーリットは街の北の高台にある屋敷に視線を向ける

バーデンファベル北舘。ファベル家に代々受け継がれてきた歴史あるその屋敷は、街を見下ろす様に建てられていた。

『…ボロいな』

「うん、ボロいね」

正直な感想を言う、相棒にユーリットは苦笑した。

数々の依頼をこなし、父がこさえた借金を全て返しきった彼女からすれば、ボロい舘を見ると辛い返済をした五年間の出来事を思い出すのだろうか、ユーリットの声は微かに震え、瞳は潤んでいる。

ただひとつ守りきったボロい舘が、やけに小さく見えてユーリットは、涙をそっと拭った。

「ユーリットぉおぉ！」

扉を開くと、涙を垂れ流し、こちらに突進してきた父親を避けると、出迎えた懐かしい面々に挨拶をする。

「おかえりなさい。ユーリ」
「ただいま帰りました、母様」
「おかえりユーリ。」
「久しぶりだな」
「お久しぶりです、ロベルト兄上とルイス兄上」
ユーリットの顔にそっくりな母と、背が高くなった長兄のロベルトと、次兄のルイスにきちんと挨拶をする。
「ただいま父上。」

「ゆ、ユーリット…。」

ユーリットは、一応父に挨拶を言うと、フードがついた外套を脱ぐ。すると腰に帯びた漆黒の剣の姿が表れ、家族の視線はその剣へと向けられる。
「これが、噂の黒剣か。成る程確かに真っ黒だな。」
『…ユーリット、誰だこいつは』
「…っ！？」
「しゃ、喋った…？」

いきなり剣から若い男の声が聞こえ、二人の兄はギョッとして、ユーリットの腰の剣を仰視する。

母のエリーゼは魔術師なためかその剣の正体が分かったようで、立派に独り立ちした娘に寂しげな笑顔を向けると、そっと抱き寄せた。

「ユーリット、貴女…魔剣の主になったのね？」

「…はい」

「「「魔剣！？」」」

復活した父親と二人の兄がハモる中、当の本人はゲラゲラと笑い声をあげている。

『やっべーマジでハモったし、流石親子！間抜け面もそっくり！！』

「…喋れると言うことは名のある魔剣とお見受け致します。私はユーリットの母、エリーゼと申します。よろしければお名前を伺っても？」

『俺の主の母なら礼儀は無用だ。俺はヴァルフリート。転換のヴァルフリートだ。宜しくなおふくろさん』

「ユーリット…お前、《トルギストフの聖魔十剣》だと知ってて契約したのか？」

「ううん…森で拾ったら契約してくれって言われたから契約した。」

トルギストフの聖魔十剣とは、鍛治の神と呼ばれた鍛治師トルギストフ・ハーブェイが鍛えた十本の剣で、各々意思をもち、主を自ら選ぶという。

十本のうち五本は魔剣、もう半分は聖剣と呼ばれている。

聖剣と魔剣…どう違うかと言うと、剣に宿っている魂が違うのだ。聖剣は聖霊の魂がやどり、魔剣には太古の魔族の魂が宿っていると言う。

一本ではあまりにも強力すぎるため、トルギストフは魔剣と聖剣を夫婦剣として互いに封じあえるように二本一対に造ったと言われているが、今では殆どはちりじりになり、何処にあるかも不明なためそれが真実かどうかは解らない。

まさか身内がその十本の中の一本の主になっているとは、露知らず、エリーゼ意外の三人は顔色を蒼白にさせていた。

「あれはあれか？…親父の呪いか何かか？私の可愛いいユーリットが魔剣の主とか、マジ泣きそう。私がちゃんとしてればユーリットは今頃立派なレディに…」

「いやいや父上、さすがに剣術馬鹿なお祖父様でも予想外だったと思うよ。てか、ユーリットは立派なレディだからね」

「…ルイス。父上の妄言に付き合うな。魔剣殿、私はロベルト・ファベル。ユーリットの一番上の兄です。以後お見知りおきを。」

「あ、俺は次兄のルイスです。よろしくね」

『おう、よろしく』

二人の挨拶に朗らかに返す陽気な魔剣に、二人は笑みを溢す。

控え目で大人しい性格の妹にはある意味ぴったりな剣かもしれない。魔剣なのにどこか人間臭くて、明るい性格は実に親しみやすかった。

「ユーリット、今日は疲れただろう。呼び戻した理由は明日説明するから、今日は自分の部屋で休むといい。魔剣殿も手狭な屋敷ですがごゆるりとしてください」

「はい。」

『ぶっちゃけユーリットの腰にぶら下がってただけだから…疲れては居ないんだが…ありがたく休ませて貰うぜ』

現実に帰ってきた父親にようやくまともな返事を返すと、ユーリットは一礼すると、自室へと向かった。部屋は綺麗に掃除されており、

五年間と変わらぬ模様にユーリットは安堵した。
父のユリアスは乙女趣味で、ユーリットにアマアマなレースやピンクのものを着せたがる。毎回ユーリットが嫌がるので諦めていたが、五年間部屋は無事だった様だ。模様替えさられていたら、迷わずエレナダに帰っていただろう。

ユーリットは甲冑を脱ぎ、騎士服のまま部屋の長椅子に横たわると瞼を閉じる。

「ヴァル、夕食になったら…起こして。」

『へいへい。』

「……絶対だよ？」

『へいへい』

いまいちやる気のかけた返事にユーリットは気にも止めずゆっくりと目を閉じた。

一幕（後書き）

父親の借金はおよそ日本円で３０００万ぐらいです。

ですがギルドの仕事で高額なものを六回か七回うければ返せる額です。

ヒロインは１１歳からギルドで働いてますので、小さな仕事から大きな仕事まで満遍なく五年間受けてたら借金は余裕で返せるんです。

この世界では多分冒険者が一番手っ取り早く稼げる仕事です

二幕（前書き）

・トルギストフの聖魔十剣

現在４本は消失、６本が現存している。
ヴァルフリートとユーリットの出会いは別の機会に出します

・ファベル家一覧　・

祖父・エドワード
祖母・ブリジット
父・ユリアス
母・エリーゼ
長兄・ロベルト
次兄・ルイス
末娘・ユーリット

※祖父のエドワードと祖母のブリジットは既に故人です

二幕

早朝４時、まだ朝日も昇らない暗い道を馬車がある一軒の舘へとやってきた。

ロベルトはそれを待っていたかのように、手にランプを持ち、来訪した馬車を使用人と共に出迎える。

馬車は家の玄関先で停車すると、中から３０代ぐらいの黒いドレスに身を包んだ女性が、馬車から降りてきた。

「お待ちしていましたマートック夫人。」

「ごきげんよう。ロベルト様。妹君が御帰還されたとお聞きし急いで王都を出たのですが、何分急だったためにこのような時間に到着とあいなりました。申しわけありません。」

「いえ…さぞお疲れでしょう。どうぞ中へ。暖かい紅茶をお入れしましょう。」

皆寝静まる早朝にやって来た客は、そっと屋敷を見上げると、ロベルトの後に続き、歩きはじめた。

「おはよう…ヴァル。」

『ふぁあ…もう朝か。おはようさん。』

ユーリットはベットから起き上がると、壁に立て掛けた相棒のヴァルフリートに朝の挨拶をする。

ベットから降りてクローゼットを開けると、母が揃えたのかシンプルで趣味の良いドレスが何着かあり、水色のドレスを選ぶと早速着替えることにした。

ちょうど支度を終えた頃、ドアのノック音が部屋に響き渡り、ユーリットは扉へと向かう。

最近雇い入れた使用人が朝食を伝えにでもやって来たのだろうか…？

扉をあけると、黒いドレスを着た知らない女性が立っており、ユーリットに膝をやや屈めて会釈した。

「…？」

「失礼いたします、私は王宮女官を拝命しておりますサリア・マートックと申します。」

「お会いできて光栄ですマートック夫人。私はユーリット・ファベルと申します。以後お見知りおきを」

王宮女官と言うことは、貴族の未亡人だ。ユーリットは冷静に会釈を返す。それをサリアは目を細めてジッと見つめると何か納得したのか、軽く頷いた。

というか、何故田舎街に、しかも我がボロいファベル家の屋敷に王宮の女官がいるのだろうか。しかもいきなり朝一番でユーリットの部屋に訪問したのは何の目的があってのことなのか…。ユーリットは内心、慌てたが、長年の経験上、対応は迅速に冷静に対処するのに慣れていたため咄嗟に挨拶出来たのは不幸中の幸いだろう。

しかし、ユーリットは未だに状況が理解できずにいた。

「あの？」

「失礼、想像したよりも華奢な方だったので…。不快になられたら申し訳ありません。よろしければ、食堂にご一緒いたしませんか」

「…はい。」

ユーリットは脳内でサリア＝父の客と認識するとサリアと共に部屋を出た。

「朝早くに不躾な訪問をお許し下さい。実はわたくし、公務でこちらに来たのですが、二、三貴女にどうしても伺わなければならない案件があり、こうして恥を忍んで朝食にお誘い致しました。申し訳ありません」

つまり、個人的に聴きたいと言う事は、ユーリットの家族の前では聴けないことだ。

現在この屋敷には三人の召し使えがいる。ユーリットが借金を返してから雇い入れた召し使い達は恐らく今頃は朝食の準備で厨房にいるだろうし、兄と父達は客を迎える準備で忙しいはずだ。

それを把握しているなら、この女官は頭が切れる人なのだろう。

人気がない朝の廊下を歩きながら聴くと言うことは、よほど急ぎの案件と言うことか。

「驚きましたが、不快には感じてはおりません。…私に聴きたいこととは何でしょうか。」

「はい。ユーリット様は武術が得意とお聞きしましたが、他に女性貴族の嗜みは？」

女性貴族の嗜みと言うことは芸事だろう。ユーリットは昔から祖父との剣の稽古の他にも芸事を学んでいたが、絵画と音楽は壊滅的といっても良い。しいて言うなら

「…刺繍と、調香は得意です。ダンスも嫌いではありません」

「結構。ご様子からして、読書や詩作も不可ではなさそうですね。」

「ええ、まあ」

「…もうひとつ。貴女は処女ですか？」

その質問にユーリットも驚いたのかバッとサリアを見上げた。

「…。」

恥ずかしくなり目を反らして無言で頷けば、サリアは眼鏡を押し上げ、容赦なくユーリットを見下ろす。

「では、意中の男性もいらっしゃらないのですね？」

「はい。と言うか…あのサリア様、何故そのような質問を？」

「それは朝食の時にご説明いたします。私がここにいる理由を、お父上から直接お聴きするほうが宜しいでしょう。それと数々の非礼な質問をした事をお詫びいたします。」

立ち止まり、頭を下げるサリアにユーリットは困った様子でそれを見下ろした。

（…ヴァルを連れてくれば良かった。）

喋り下手なユーリットは、気まずい空気に返す言葉が見つからず、とりあえずサリアを食堂へ促すことにした。

食堂につくと既に両親と兄たちが揃って二人を待っていた。

「おはようございます。」

「おはよう。」

「おはよう。ユーリット」

食卓に並んだ朝食を見るとユーリットはサリアに上座を進めると、自分は下座の次兄の席へとつく。

全員が席に座ると、恒例の祈りをささげ、各々朝食に手をつけはじめる。

「…さて、ユーリット。聴きたい事が多々あると思うがまず、お前を呼んだわけを説明しよう。」

珍しく真面目な父にとユーリットは頷くと手を止めて、ユリアスに視線を向ける。

「…実は半年後の春月に第一公女、アリエル様が、隣国エリストナ王国のエルンスト王太子の側妃として嫁ぐ事になった。」

ユーリットは表情には出さずに内心で首を傾げた。

ママレカ公国は小国だが、その公王家の血には間違いなく《王権の王冠》が流れている。

それを抜かしても一国の公女を王太子妃ではなく、側妃に嫁がせるとはママレカ公国に喧嘩を売っているとしか思えない。

「…恐らく何故、側妃なのかと思うだろう。しかし、これには深いわけがある。

アリエル様の母君、第二妃のハミエラ様は元農民だとお前も知っているだろう？それをあちらの五大公が気にくわないようなのだ。」

そう、現公王ロドニー二世の第二妃のハミエラは農民出身の妃なのは国内外でも有名な話だ。

しかし、ハミエラ妃が公妃になったのはその血に流れる祝福によるものだ。

ハミエラ妃の先祖は大地母神の神官で、《慈母の恩恵》を血に宿していた。

《慈母の恩恵》とはその血の祝福をうけた人間が存在するだけで広範囲にかけて、豊穣の恵みをうけることができる特殊な血の祝福で、極めて少ないものだ。

実際、ハミエラ妃と公王が婚姻を結ぶと前年度に比べて作物の収穫量が二倍になり、ママレカ公国は豊作続きだ。

最初は極めて珍しい血筋なので、ロドニー王は保護するだけが目的だったのだが、いつしかハミエラ妃と恋仲になり第二妃として迎えたのだという。

因みに第一公妃のエリザベス妃は、現公太子を産んだ後、まもなく亡くなっていたのでハミエラ妃は事実上、後妻と言うことになる。

ハミエラ妃とロドニー二世は三人の娘と二人の息子に恵まれたが、全員《慈母の恩恵》
持ちなため、年々、作物の収穫量がハミエラ妃とその子供達の相乗効果で凄いことになっており、北のクリエストロ帝国の食料危機を

救ったのは有名な話だ。

他国からの縁談の申し入れが後を絶たないぐらいなのに、どうして国を担う五大公と呼ばれる公爵達が反対するのだろうか。

ハミエラ妃は確かに身分は低いが、それにあまりある血の祝福を受けている。

その血を祝福をもつ姫を側妃にしろだなどとは、普通は言えないだろう。

「実は、ちょうど五大公には各々年頃の姫君がいてね。熾烈な正妃争いの真っ只中だったのだが、ここにきてアリエル姫と言うダークホースが現れたせいで、五大公は焦ってうちの姫様に難癖をつけてきたわけだ。」

…つまり権力争い中に、自分達より地位の高いアリエル姫との縁談が決まったことに反発した権力者どもの我欲のせいで、自国の姫が側妃として嫁ぐ事になったのか。

ユーリットは内心、アリエル姫と、ハミエラ妃に同情した。

ママレカ公国は大陸の食料庫と呼ばれるほど自然豊かで、農耕が盛んな国だが、武力は極めて低い。

そのため、現在北側の隣国、クリエストロ帝国と東側のエリストナ王国という二つの大国の庇護下にあるおかげで存続できているのだ。発言権が低いため、そう難癖つけられると断れないから仕方がない。

さぞかし、心を痛めていることだろう。
しかしながら、アリエル姫の輿入れと、ユーリットを呼び寄せた理由との接点が見つからない。

「…既に五大公の姫君が先に側妃入りはしたが、さすがにエリストナ国王も我が国に不敬だと感じているようで、五大公との折り合いがつけば、アリエル姫を王太子妃にすると国王直々に内約を頂いている。
外交的には問題はないのだが、ここでお前を呼んだ理由が関係してくる。」

そういうとユリアスは、ちらりと王宮女官のサリアに目配せをする。
サリアも心得たと頷くとユリアスから説明を引き継ぎユーリットに向き直る。

「姫様が側妃となると、五大公の姫君が既に入られている後宮に入室する事になりますが、後宮は男子禁制。
そのためアリエル姫の護衛をできる人間は当然女性という事になります。」

ユーリットはようやくそこで納得した。
つまり、ユリアスやサリア達はユーリットにアリエル姫の護衛をさせるために呼び戻したのだ。

確かにユーリットは没落気味とは言え、貴族の娘だ。その上ギルドでも働くほど武術に長けている。
権力争いの真っ只中の後宮に入ると言うことは、入った側妃は命を狙われやすくなる。何分王妃の最有力候補なら潰そうと考えてもおかしくはない。
普通の《騎士の家門》の祝福をもつ貴族でも女子が剣を持つことはまずないし、そう考えればユーリットは護衛に適役だった。

「…しかし、エリストナ王国の後宮にはある決まりがあります。」

「決まり…ですか？」

「はい。側妃の側近は女性であること。まあ、これは基本ですがここからが問題です。他国からの側妃の場合、側妃付きの側近は三種類に分けられております。
1、エリストナ王国の貴族未婚女性であること。2、未亡人であること　3、エリストナ王国の貴族と婚姻関係をもつ者…このいずれかの女性と限られています。」

つまり、エリストナ王国の後宮では王太子がいつ誰に手を出すかわからから、他国の未婚女性より、自国の未婚女性のほうが血筋の管理がしやすいので、側近はエリストナ王国の未婚女性と予め限定しているのだ。

しかし、それが嫌なら、未亡人か、エリストナ王国の貴族男性と結婚した貴族女性を側近にしろと言うことになる。

エリストナの王族は未亡人と結婚することは許されていないし、死人の妻に手を出すことを国民性からして忌み嫌うので、エリストナ王国の貴族でなくとも未亡人なら他国出身でも側近はＯＫと言うことだ。

これは過去に他国からの側妃か迎えた時にいざこざがあってそう言う決まりになったのだろう。

今回の場合、ユーリットが護衛のため後宮にはいる時、エリストナ王国貴族と結婚していなければならないと言うことだ。

ユーリットは廊下でのサリアの質問を思い出し、眉間に皺を寄せる。

「…つまり、父上とサリア様は…私にエリストナ王国の貴族に嫁げと？」

「…そう言うことだ。」

確かに１７歳は一般的な貴族女性の結婚適齢期だが、ユーリットはつい最近までギルドで働いていたので、いきなり結婚しろと言われるのは正直抵抗があった。

他国にいきなり嫁げと言われて、はいそうですかと言うには頭が混乱していたのだ。

「…もし、それを拒むとどうなるのですか？」

「この屋敷が更地になって、家名がなくなっているでしょうね。」

その言葉にユーリットは顔を真っ青にさせた。

つまりこれは《受諾しなければ家を潰すと言う》公王勅命と言う名の脅迫だった。

斜め前に座る母が、ユーリットに、今にもごめんなさいと泣き出しそうな顔を浮かべている。

散々苦労させてきた娘に、このような結婚を強制するなんて、あまりにも酷い仕打ちだ。母親にとっても今回の話は辛いものだった

実際、ユーリットが家に帰ってくるまで夫と大喧嘩していたし、毎晩枕を濡らしていた。

しかし、愛娘が帰ってくるのに泣き顔を見せるのは良くないと必死で我慢していたが、とうとうエリーゼはポロポロと涙を溢しハンカチを目にあてる。

娘に何もしてやれない自分が情けなくて、悔しくて仕方ない。

兄たちも同様、苦い表情をうかべ、父・ユリアスに至っては必死に拳を握りしめ何かを堪えていた。

そんな様子の家族をみて、ユーリットは目を伏せると、軽く息を吸って、サリアに真っ直ぐな目を向けた。

「誠心誠意、姫様に忠心を捧げ、姫様をお守り通すと誓約申し上げ

ます。」

「…誓いを受諾します。では、具体的な今後の予定を組みましょうか。」

サリアはユーリットの言葉に満足そうに優雅に微笑むと、ナプキンをその手に取った。

二幕（後書き）

サリア女史無双。

サラリと毒を出すタイプです。

次回に天敵の旦那がでます。

三幕（前書き）

拙い文章を読んで頂きありがとうございます。

今回はエリストナ側がメインになります。

三幕

エリストナ王国王太子近衛師団師団長

アルファン・ヴィ・ギャレットは目の前の王太子に、胃がきりきりと痛み。思わず腹部に手を当てて歯を食いしばる。

気まぐれで、気分屋でその上、ドSで腹黒。これが自国の王太子じゃなければとうに殴り飛ばしている。

王太子のエルンストとは乳兄弟で、アルファンの父も現国王の側近をつとめているほど、ギャレット家と王家の関わりは深い。

小さな頃から手に負えなかった王子だが、ようやく側妃を迎えて落ち着くかと思えば、ますます酷くなる一方で、王太子による被害が例年比に比べて1．5倍に増え続けている。

アルファンもユーリットとは別の意味で苦労人だった。

アルファンはトルギストフの聖魔剣のひとつ、《抑止の聖剣・オフィーリア》に主として選ばれるほどの実力のある将軍だが、強烈な性格の王太子の乳兄弟に産まれたせいか、完全に世話係を押し付けられ、王太子が問題を起こす度にその尻拭いに奔走させられている。

そのため、部下達から《不憫将軍》とか言われて、生温かな視線を向けられる始末…。

気まぐれな王太子の無理難題な注文も耐えぬいてきたアルファンだが、今回ばかりは笑って済む問題では無かった。

「殿下、すいませんがもう一度、おしゃって頂けますか？」

「お前のお嫁さんが１ヶ月後にくるから支度しなよと言ってるんだけど…。何？親父殿からは聞いてないの？」

「…残念ながら初耳にございます。」

確かにママレカ公国から半年後に王女を王太子の側妃に迎えるとは聴いてはいたが、自分に嫁がくると言うのは初耳だ。

「えっと、名前はユーリット・ファベル（１７）ファベル伯爵家の長女で、名将エドワード将軍の孫娘。小さなころより祖父から剣術を教わり、弱冠１１歳で冒険者ギルド《海の秘宝》で働き、１５歳で魔法騎士の称号を取得。竜退治１５回、盗賊、海賊の捕縛及び殲滅１８回。その他の護衛経験が豊富でついた二つ名が《黒剣のユーリット》…へぇ、お前にぴったりのゴリラ女じゃないか。」

「…と言うかなんで伯爵令嬢が冒険者やってるんですか。竜退治とか盗賊殲滅してるとか普通の令嬢がすることじゃないですよ。て言うかそれ…本当ですか？疑わしいことこの上ないんですけど」

「本当だよ。間違いない。父親の借金と、病気がちな母親の治療費のために冒険者やってたみたいだね。３千万ルークの借金を四年で換算してて、その後は家へ仕送りしているとか…この子１７歳にして壮絶な人生送っているねぇ」

ヘラヘラと笑いながら調査書読む王太子に、眉間に皺を寄せる。アルファンも思わずなんて不憫な子だろうと思ったが、自分と結婚となると話は違ってくる。

「…つまり、そのユーリット殿はアリエル姫の護衛として後宮にはいるため、俺と結婚すると言うことですか？」

「そうだよ。良かったね、逞しいお嫁さん貰えて」

「全然嬉しくないですよ！何で俺なんですか！？他にもいるでしょうが！」

思わず立ち上がり抗議すれば、エルンストは気だるげに金色の相貌をアルファンに向けてニヤリッと笑う。

「みんな嫌がったから君にお鉢が廻ってきたんだよ。アリエル姫の側近の夫となる家格の貴族は、お前しか残っていないし、結婚適齢期だから丁度いいんじゃないかと、お前の親父とうちの親父殿がサクサクと纏めちゃったんだ。僕に抗議しても無駄だよ」

「…っ…」

思わず胃が痛み、項垂れるアルファンに、エルンストは王妃に良く似た甘い笑顔で追い討ちをかけるように言い放った。

「僕も嫌々お嫁さんもらってるんだから、お前も諦めてお嫁さん貰いなよ。」

その言葉はいつになく真っ当な言葉だったのでアルファンは余計に腹が立った。

普段チャラチャラしてる奴から正論を言われると余計に腹立たしいことこの上ない。

拳を握りしめて、アルファンは勝手に縁談を決めた父親に怒りの矛先を向けると、ゆっくりと執務室の扉へと向かった。

アルファン・ヴィ・ギャレット（２５）

王太子と胃痛との戦いは今日も寝るまで続く

エリストナ王国の国土は、作物を育てるには適さない土地だった。

年々クリエストロ帝国と反対に、気候が暑いために植物があまり育たない。

どちらかと言うと、鉱物資源が豊富で、鉄や金、銅などがよく取れる。

砂漠化していないのは地下水が豊富なことと、暑さに強いエブナの木がたくさん自生しているのが大きい。

そのため、エリストナ王国は北国のクリエストロ同様にママレカ公国の食糧を頼りにせざるを得ないのだ。

クリエストロは、宝石類や加工技術なら世界一の技術力を有した国で、エリストナで仕入れた材料で飾物や工芸品をつくり他国に高い値段で売り付ける。また、軍事技術も高く彼らが作る武器も主力製品のひとつだ。

軍事力ならエリストナも負けてはいない。

エリストナは世界一冒険者ギルドが多い国で、初代国王は傭兵だったことから、傭兵の国と呼ばれる猛者揃いの国だ。

もしママレカ公国に手出ししようものなら、この二つの国が黙ってはいない。

分かりやすくいうと、目の前の美味しそうな羊を食べようとすると、後ろに控える狼と獅子に逆に食い殺されてしまうと言う状況が４００年ぐらい続いている。

三国の関係は、各々良好で歴代の王族同士の結婚も多くある。

現に、王太子エルンストの母はクリエストロ帝国皇帝の妹である。

現在、夫であるエリストナ国王　バルジ？世は五人の公爵に頭を悩ませていた。

確かに王族同士の結婚は近親婚を招きやすいが、エリストナ王家とママレカ公国公家の縁談は約１５０年ぶりだ。近親婚と言うには不適切だろう。

それなのに五人の公爵達はアリエル姫の母の出自の事などを理由に、難癖をつけてくる。

その背景にあるのは現在の王室に原因がある。

クリエストロ帝国は一夫一妻を基本としており、エリストナ王家のような後宮と言うものはない。

そのためバルジ?世と王妃が結婚する際にある確約を結んでいた。

《王妃以外の側妃をとらないこと》

それが王妃を嫁がせる時のクリエストロ側の唯一の要求であった。

その要求のおかげか王妃と国王との仲は非常に円満で、三人の子を授かっている。

面白くないのはエリストナ王国の貴族達だ。彼らは自分の娘を後宮にいれることで立場を築いてきた人間だ。

特に五大公には国王に嫁がせるためだけの娘がいたのだが、彼女らはその役目を全うできず、家格の低い家へと嫁いでいった。

現大公達はその兄や弟にあたる。姉妹達の悲劇を見てきた人間としては、自分の娘に同じ轍を踏ませたくないのは当然の事だ。

強引に後宮に娘達を捩じ込む事に成功して、いざこれからと言う時に、ママレカ公国との縁談は寝耳に水だったに違いない。

ママレカ公国も一夫一妻制が主流だ。

五大公としては、クリエストロ帝国と同様の要求をされた場合、や

っとこさ後宮にいれた娘達が後宮から出されるかもしれない。

それに過剰反応をした公爵達は一致団結し、公女の王妃入室を阻止する事に同意した。

公女の血に流れる《慈母の恩恵》などどうでも良い。これ以上余所者に王室を牛耳られるのは我慢ならない。

それが五大公と呼ばれる公爵達の意見である。

まさに国益を無視した貴族らしい矜持を全面に出した、歪んだ考え方だ。これには流石の国王も辟易した。

（私情入り過ぎだろう…五大公。）

別にママレカ公国は後宮に対してなんの不平不満はクリエストロみたく言ってはいない。あちらは、どちらかと言えばお国柄的に他国の文化に自分の文化を押し付ける事はしないタイプの国だ。

確かに後宮の事は良くは思ってはいないだろうが、それを言える立場でもない。

そもそも王族の結婚とは、外交手段のひとつであり、国益に大いに影響を及ぼす一大プロジェクトだ。

本来、五大公のような貴族達が口を挟むこと事態こそ越権行為だが、中央政治に関わらない地方領主たちが殆ど五大公側についてるせいか、増長しているため聞く耳を持たないのだ。

穏便に事を進めたい王はどうしたものかと、宰相に相談したところ、返ってきた答えは

「それ以前に王太子様をどうにかして下さい。」

と冷たい眼差しで言われてしまった。あの馬鹿息子が！と内心罵倒したが、あの性格は今更変えようがない。

ハァと溜め息を思わず溢す。

「…こうなったらアルファンとその嫁に頑張って貰うしかないか」

息子の側近であるアルファン・ヴィ・ギャレットにアリエル姫側の側近になる少女ユーリット・ファベルとの結婚を決めたのは、息子と姫をくっつけさせて早く子供を作らせるためだ。

側近同士が夫婦なら、お互いの主がどういった様子が情報交換とかやり易いだろうし、それとなく二人の後押しをしてくれる…はず。流石に五大公もエルンストとアリエル姫の間に第一子が産まれたら、アリエル姫を王妃にすることに文句を言えないだろう。アルファンとユーリットには是非とも二人の恋のキューピッドになって貰わねば！！

そして、可愛いい初孫を今度こそ理想的な王子に…いや姫でもいい。父親に似ないよう私が育ててみせる！

バルジ・ファタ・エリストナ。（４５）

やや薄くなった髪の毛と戦う王の背中には、充分五大公に匹敵するほどの私情が混ざった決意が宿っていた。

三幕（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

王太子のキャラクターは強烈でサクサクっと書けました。

父親の国王を親父殿と呼びにしたのは、何となくです

多分公式の場ではきちんと「父上もしくは陛下」と呼んで猫かぶってます。

体面とかどうでも良さそうな人だけど、アルファンに言われて渋々そうしてます。

国王陛下も中々に濃い人なのでやっぱり書いてて親子だなぁと感じます。

では次回

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9099y/

転換の魔剣と抑止の聖剣

2011年11月28日04時56分発行